

# 学長対談

社会が求める、未来を拓く  
これからの人材育成。

日本文理大学  
橋本 堅次郎

共愛学園前橋国際大学  
大森 昭生

**NBU**  
NIPPON BUNRI UNIVERSITY  
日本文理大学

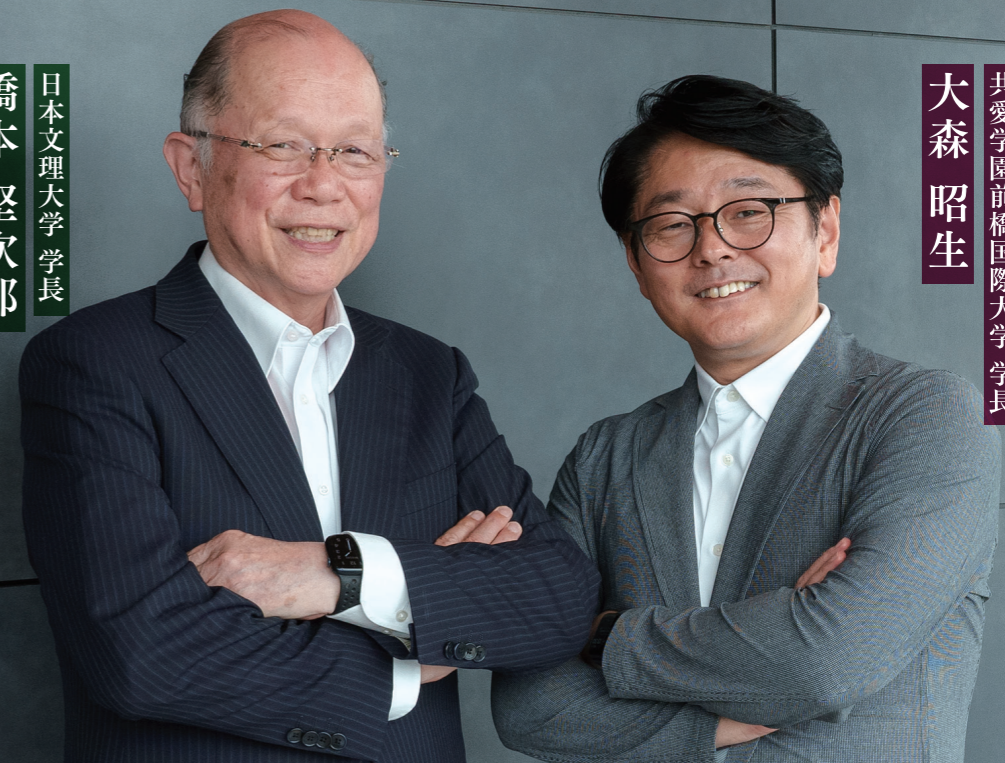
# 学長対談

## President's Dialogue

「大学ランキング2025 (AERA 朝日新聞出版 全国799大学対象)」の「注目する学長」部門で3年連続1位に輝いた共愛学園前橋国際大学(群馬県)の大森昭生学長と、日本文理大学の橋本堅次郎学長が、未来を創造する人材の育成、高大連携教育の重要性、地方にある私立大学として目指すべきビジョンなどについて語る対談が実現。

日本文理大学学長  
橋本堅次郎

共愛学園前橋国際大学学長  
大森昭生



## 地方大学だからできる 次世代の人材育成のあり方

### 社会に求められる教育で 幸せに生きる力を

橋本:共愛学園前橋国際大学の取り組みや大森学長のことは、新聞やテレビ、雑誌などさまざまなメディアで拝見し、以前から注目しておりました。地域と一体となった教育を推進している点など、本学との親和性を強く感じています。そして何より、首都圏の大学ではなく、地方都市の大学が目目され、ランクインしたことが大いに励みになりました。

大森:ランキングが発表されたときは素直に嬉しかったですね。ただ、学長ランキングの結果よりも、「教育面で注目する大学」としてランキング4位という結果の方が重要なんです。本学は群馬県での認知度は高いものの、全国的にはあまり知られていません。それほど知名度が高くない大学が全国的に注目されるようになり、学長の評価も少しずつ上がってきました。全国にある大学の学長たちは常に他大学を見渡し、各大学の取り組みを自分の大学に取り入れ、アップデートを図ります。

橋本:いつの時代も教育現場は変化していくものですので、アップデートは必要ですよ。私は「社会に求められている大学」「社会に求められている教育」について常に考えてい

ます。キャンパス内だけでなく、地域に出て行くことで社会が求める人材を養成できると考えたのです。本学は2014年からCOC事業(地(知)の拠点整備事業)をスタート。「大分県全域をキャンパス」に地域志向型科目を展開し、社会と継続的に関わりながら課題解決に取り組んでいます。全学で人間力の育成を目標に成果を積み重ねてきたことで、県内からの志願者も増加し、本学の学びが評価されたものと考えています。

大森:企業の方からも、日本文理大学の学生は、皆さん主体性がありモチベーションも高いと聞いています。私は、教育とはそこで学ぶ人にとって「生涯の幸せのため」にあると考えています。幸せになるためには、今、必要とされている力を身につけてはなりません。その能力は時代とともに変化するわけですが、大学という大きな組織の場合、社会情勢や企業が求める人材とのズレが生じてしま



うことも少なくありません。大学は学生たちのための場所ですから、常に社会と向き合いながら、その時々求められる資質・能力を身につけられる学びを、学生たちとともにつくっていかねばなりません。

橋本:社会の変化を敏感にキャッチし、学生に必要な能力をしっかりと届けることができる大学となるよう「学生たちが4年間で何をできるようになるのか」を私たちも追求し続けています。単に勉強ができるだけでなく、人間力に溢れた人材を育成することができたこと、そして学生にとって魅力ある就職先の創出をすることができたのはこの10年間の成果です。

### 高大連携で生まれる 学びの好循環

大森:近年、高校でも「総合的な探究の時間」がスタートし、体験的、研究的な授業が推進されるようになりました。高校の先生方は生徒たちに成功体験を届けたいと尽力されています。もちろんそれ自体も素敵なことなのですが、成功することが全てではありません。成功であろうと失敗であろうとその体験を学びへと昇華させられるかが大切です。プロジェクトが終わったら振り返り、どんな力が身についたのかを生徒たちが自覚できるようにすることが体験を学びに変えるポイントです。それこそが、私たち教員の腕の見せどころですね。そのノウハウと経験を日本文理大学は有している。大分県内の高校と協力しながら、高校と大学

が一体となって取り組む高大連携スタイルも新たな学びのひとつになるかもしれませんね。橋本:探究の学習で、社会の課題を発見し、答えを導き出す能力をすでに身につけた高校生が大学に進学してくることになります。課題解決力を身につけて入学することで、学びの好循環が生まれると考えるだけでわくわくしてきますね。高校時代から身につけた探究心や課題解決の力をさらに伸ばしていけるよう、大学教育のレベルをさらに上げ、内容もアップデートさせる必要があります。高大が連携して一人ひとりが主体的に行動し、学びの質の総和が増大することこそ、高大連携の理想の姿ではないでしょうか。



大森:橋本学長のおっしゃる通り、大学の学びを進化させていかなければならない。大学ではインプットの量や質も上がります。さらに幅広く、より深い学びを届けることで、学生たちの可能性が広がります。

橋本:大学で教育の幅を広げるためにも、学生たちの学びの器のサイズを拡大することへの注力が重要。私たちは「卒業後に彼らが成長するための「伸びしろ」を大学時代にどれだけつけてあげられるのか」に着目した教育を届けたいと考えています。10年後、

20年後に活躍する人材を育成することが大切ではないでしょうか。

大森:私は高校時代には「成長するチャンス」を掴み取る力を身につけてほしいと考えています。社会人になったら、誰かがチャンスを与えてくれるわけではありません。限られた時間の中で小さなアクションを起こし、自分でチャンスを掴み取れるかどうかによって、成長曲線が全く異なります。

橋本:そうですね。さまざまな解が存在する社会の中では、考えること自体が重要なことだと思います。高校での出張講義ではあえて正解がひとつではない質問を生徒に投げかけることがあります。テストで満点を取ることも大切ですが、頭を悩ませ、考え抜く力を身につけてほしいですね。

### 地域や大学間の交流で 地方の活性化を図る

大森:日本文理大学や本学で取り組む学びのスタイルとして、自分で課題を設定し、地域の人々と協働しながら答えを探し、解決を目指すことが挙げられます。解決までの過程や振り返りがこの予測困難な時代に生きる力を育んでくれるのです。

橋本:教員や職員のサポートをはじめ、地域の皆さんが学生とつながり、支援してくださることが、本学、そして地方大学の強み。また東京を経由せず地方都市が世界ともつながれるような時代になりました。それゆえグローバルな視点があれば地域課題の本質を掴むことはで

きません。地域を発展させるためには、共愛学園前橋国際大学も本学も重要なテーマとして取り組んでいる、グローバルな視点を持ち、ローカルで活躍する人材「グローカリスト」の育成は欠かせませんね。

大森:世の中の新しい動きや変化に対応し、先取りするためには地方大学間で連携を図ることが重要です。また、人と人との交流や情報共有は、新たな制度やシステムの構築にもつながります。今後も、日本文理大学とはオンラインも活用しながら情報交換や共同プロジェクトなどで、交流を深めていきたいと思っています。きっと面白い化学反応が起きるのではないかと期待しています。

橋本:共愛学園前橋国際大学の学生が大分、本学を訪れて共同で研究合宿するのもいいですね。学生の交流はもちろん、研究するための場も積極的につくっていきましょう。多様なモノやコトが融合し、地域の特色を生かしたプロジェクトにチャレンジする。共愛学園前橋国際大学をはじめ、全国の地方大学とのつながりをもっともっと大事にしていきたいですね。今日は充実した時間でした。ありがとうございました。



NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727  
TEL.0120-097-593 E-mail nyuusi@nbu.ac.jp

2024年6月発行